Vol.2019-CH-121 No.10
2019/8/1

コーパスを利用した英語関係節の意味的分析

鈴木一徳[†1]

概要：本研究では、英語の関係節形成における名詞句がもつ意味的要因の影響を調べる。従来、関係節化された名詞句は、主語位置または目的語位置から関係節の主要部に移動する分析がなされている。特に目的語関係節の形成においては、主語名詞句を越えて関係節が形成されることから、形成プロセスにおいて主語名詞句と目的語名詞句の持つ意味的要素（有生性）が影響している可能性が考えられる。本研究では、英語コーパスを用いて、関係節形成における名詞句の意味的要因を分析した結果を報告する。

キーワード：第二言語習得，学習者コーパス，有生性，介在効果

A Semantic Analysis of English Relative Clauses using the Learner Corpus

KAZUNORI SUZUKI[†1]

1. はじめに

本研究では、日本語を母語とする英語学習者のエッセイにおける英語関係節を意味的な側面から検討する。ICNALE（The International Corpus Network of Asian Learners of English）という、アジア圏の英語学習者のスピーキングおよびライティングのデータで構成されているコーパスを用いて、関係節形成における有生性の影響を調べる。

関係節は、大きく分けて主語関係節（SRC）と目的語関係節（ORC）の 2 種類がある。（1a）に SRC、（1b）に ORC の構造を示す。なお、関係節内の下線は、関係節化された名詞句の元の位置を示している。

(1) a. [DP The boy [CP who [TP _ [VP is kissing the girl]]] …
b. [DP The girl [CP who(m) [TP the boy [VP is kissing _]]] ...

第二言語習得研究の領域では、SRC よりも ORC の方が習得が困難であることが指摘されている[1] [2]。しかし、関係節内の名詞句の意味的要素（i.e., 有生性）の介在効果が第二言語習得に影響を及ぼすかを検討した研究は少ない[3] [4] [5]。そこで、本研究では、関係節内の名詞句の有生性の影響を、学習者コーパスを用いて検討する。

2. ICNALE について

アジア圏の英語学習者のデータを集めた ICNALE コーパスは、スピーキング・ライティングのデータで形成されている。学習者の母語は、日本語をはじめとして、中国語、韓国語、インドネシア語、タイ語、タガログ語など様々である。

本研究では、日本人英語学習者を対象に収集されたライティング（エッセイ）のデータを分析する。分析に使用したデータは、Written Essays Version 2.3 であり、サンプル数は 5600 である。日本人英語学習者の英語習熟度は、CEFR の A2～B2 であるが、本研究では、データ数が多い A2 および B1 の学習者のデータを分析することとする。エッセイのテーマは、“It is important for college students to have a part-time job”であり、学習者はこのテーマに関して 200～300 語のエッセイを書いた。

3. データ抽出方法

英語関係節の抽出に際して、コンコーダンスで who、whom、which の 3 種類の関係代名詞を検索し、テキストデータを作成した。そして、関係節の構造および有生性の観点からマーキングをし、タイプごとの頻度を算出した。

4. 結果

who の検索結果からは 231 件、which の検索結果からは 169 件、whom の検索結果からは 2 件のヒット数が確認された。そのうち、関係節にかかわるものは、who が 205 件、which が 145 件、whom が 2 件であった。合計 352 件のデータを基に、構造・意味の観点からの分類を行い、分析する。

†1 東京工業大学
Tokyo Institute of Technology

ⓒ2019 Information Processing Society of Japan

データ分析では、主語名詞句と目的語名詞句の有生性を検討するため、自動詞の関係節（e.g., The boy who is working…）は分析対象から外し、他動詞にかかわるもののみを抽出した。

4.1 A2 の結果

表 1 に A2 学習者の結果をまとめる。SRC における Match 条件（有生・有生）では 11 件のデータが確認された。SRC における Mismatch 条件（有生・無生）では 41 件のデータが確認された。また、ORC における Match 条件（有生・有生）では 3 件のデータが確認された。ORC における Mismatch 条件（有生・無生）では 57 件のデータが確認された。

表 1　A2 の結果の分布

	SRC	ORC
Match	11	3
Mismatch	41	57

4.2 B1 の結果

表 2 に B1 学習者の結果をまとめる。SRC における Match 条件（有生・有生）では 9 件のデータが確認された。SRC における Mismatch 条件（有生・無生）では 63 件のデータが確認された。また、ORC における Match 条件（有生・有生）では 10 件のデータが確認された。ORC における Mismatch 条件（有生・無生）では 52 件のデータが確認された。

表 2　B1 の結果の分布

	SRC	ORC
Match	9	10
Mismatch	63	52

5. 考察

どちらのレベルの学習者も Match 条件（有生・有生）よりも Mismatch 条件（有生・無生）の産出の方が多かった。これは、主語名詞句と目的語名詞句における有生性の介在効果が影響していると考えられる。

また、SRC と ORC の産出数は同程度であり、ORC が特別に習得困難であるとは言い切れない結果となったことから、やはり、関係節の産出については、構造的な差よりも意味的な差に影響されることが考えられる。

6. おわりに

本研究では、英語学習者コーパスの ICNALE を用いて、学習者のライティングにおける関係節の産出を調べた。学習者の関係節の産出頻度の結果から、SRC か ORC かという構造的な影響ではなく、関係節内の名詞句の意味的要素（有生性）が影響していることが分かった。

参考文献

[1] O'Grady, W. (2001). A linguistic approach to the study of language acquisition. Journal of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics, 5, 57–71.
[2] Gass, S. (1979). Language transfer and universal grammatical relations. Language Learning, 19, 327–344.
[3] Friedmann, N., Belletti, A., and Rizzi, L. (2009). Relativized relatives: Types of intervention in the acquisition of A-bar dependencies. Lingua, 119, 67–88.
[4] Belletti, A. and Rizzi, L. (2013). Ways of avoiding intervention: Some thoughts on the development of object relatives, passive, and control. In Piattelli-Palmarini, M. and Berwick, R.C. (eds.), Rich Languages from Poor Inputs (pp. 115-126). Oxford: Oxford University Press.
[5] Suzuki, K., and Hirakawa, M. (2018). Relative clauses in heritage Chinese: Explanation by the Relativized Minimality approach. Poster presented at the 28th Annual Conference of the European Second Language Association (EuroSLA 28). University of Münster: Germany.

ⓒ2019 Information Processing Society of Japan